

下関西高等学校 進路だより

令和7年12月号 進路指導部

～西高生、無理を狙え！～

いよいよ冬本番、本格的な受験シーズンを迎える時期となりました。本校は国立大学への一般選抜による進学希望者が大半でこれから本番だという生徒ばかりです。そこで、今回は今年度入試の概況と難関国立大学の動向についてのトピックをベネッセや河合塾の研究会の資料を参考に紹介します。なお、志望者指数などは第2回駿台・ベネッセ模試の数値です。3年生は共通テスト後の出願の、低学年の生徒は来年度以降の受験準備の参考にしてください。

1 全体概況について

国公立大と私立大の志望者数は一般入試で増加が見られます。特に文系の受験者数が国立大学で指数102とやや増加しています。学部別では国公立大では経済・経営・商学系統の人気の続く一方、生活科学、保健衛生学系統で志望者数の減少が目立ち、資格志向の弱まりが傾向としてみられます。また、国公立大では広島大学法学部の後期日程の募集人員25名を廃止し、前期日程に回すなど後期日程の縮小、廃止が継続しています。

2 難関国立大学について

国立大学(東大、京大、北大、東北、東工大、一橋、名大、阪大、神大、九大の難関10大学について)

難関国立10大学の志望者数は指数105です。教育課程の変更にもなう大きな入試変更が一段落したこともあり、受験生の安全志向が弱まっています。難関10大学の個別の状況を見ると、北大が指数106、東京科学指数103、一橋指数116と志望者の増加が目立ちました。下の<図表7>は人気系統の難関情報系学部・学科の難関10大学の志望動向をまとめたものです。定員増となる京大(工-情報)は志望者が増加しました。このほか、東京科学、阪大も志望者が増加しています。ただし、志望者が減少している大学や名古屋大のように学部・学科によって差が出るケースもみられ、一様に人気を集めているという状況ではありません。当然ですが、難関大学は個別試験の配点が高く、現役生の逆転合格も多くみられます。難関大学を志望している生徒は模擬試験で判定が出ていなくても諦めないでください。

大学	学部	学科	志望者数		
			2025	2026	前年比
東北	工	電気情報物理工	730	647	89%
東京科学	情報理工		549	623	113%
一橋	ソーシャル・データサイエンス	ソーシャル・データサイエンス	149	149	100%
名古屋	工	電気電子情報工	582	628	108%
	情報	全学科	789	661	84%
京都	工	情報	484	506	105%
大阪	工	電子情報工	526	551	105%
	基礎工	情報科学	363	368	101%
神戸	システム情報	システム情報	461	460	100%
九州	工	I群	501	500	100%

<河合塾ホームページより>

(次のページへつづく)

・東大

どの科類も共通テスト得点率が80%台後半で合格率が60%を超えます。東大・文科類では記述模試の偏差値72が合格率60%以上の目安となり、文Ⅰ、文Ⅲはともに指数が103と増加しています。両学類ともに偏差値70付近の志望者数が増加しています。第一段階選抜が厳格化されたことにより、東大内部や他の難関国立大への志望変更、難関私立大との併願関係が強くなりました。理Ⅰ、理Ⅱはともに合格率60%となるラインは偏差値74で、こちらも例年と大きな変化は見られませんでした。理Ⅰの志望者数はB判定値以上の学力層でもやや増加がみられます。理科類も第一段階選抜が厳格化され、前年の模試動向では東京科学・工を志望変更先と検討する志望者数が増加していましたが、今回の模試動向でも、この傾向は強まっています。理Ⅱは、志望者数の主な増加は偏差値60以下の学力層となっていて、併願志望先を前年と比較すると京大の工学部、理学部を志望変更先として検討する志望者数の増加がみられます。なお、文科系では英語・数学で合格者と不合格者の得点率の開きが大きく、英語・国語・地歴の得点率が50%を下回ると合格率が大幅に低下します。理科類で差が開いたのは24年度入試に引き続いて数学でしたが、こちらは英語、数学、理科で得点率50%未満の合格率は増加しています。

・京大

法の指数は102と前年並みですが、阪大や神大の法学部との併願志望者が増え、記述模試におけるC判定以下の偏差値65から70の志望者が増加しています。経済も指数103とやや増加しています。特にB判定値72からC判定値69の層で志望者が増加しており難化する可能性があります。また、理系では工学部物理工で指数105とやや増加しています。B判定値68以上の上位の志望者が増加しているためこちらも難化の可能性があります、その他の工学部募集単位も概ね同様の傾向が見られます。工学部は第2志望まで志願できるので出願戦略が重要となります。昨年度入試の最低点は高いほうから情報、物理工、電気電子工、建築、地球工、理工となっていますが、情報と理工では総合得点で70点以上の開きがありますので第2志望をどのように位置づけるかがポイントとなります。農学部は第6志望まで志願できるので今後の動きに注意が必要です。なお、得点開示から理学部は数学と理科、薬学部は国語と英語が得意な生徒が合格している傾向が見られます。

・九大

志願倍率で見ると、過去10年間を見てもセンター試験や共通テストの平均得点、入試変更などの影響をあまり受けずに毎年2.4倍から2.6倍の間で推移し、2021年度から5年連続で同じ志願倍率2.6倍になっています。前期日程対前年比で最も志望者指数が増加しているのは経済学部で122。続いて農学部の121となっています。法も人気が高く、B判定値周辺の志願者が増加しています。都道府県別志望状況に関しては、福岡県の受験者数が増加しています。工学部も全体では指数114と高いですが、学部全体の過去年度の入試と比べてB判定値に満たない層の志望者が増加しています。また、昨年度に比べて、今年度の方が九州大学工学部内の併願関係が高まっており、共通テスト後のⅠ群からの志望変更が多くなる様相を呈しています。なお、工学部についての確認ですが、Ⅰ群から進むことが出来る学科は電気情報工学科です。「計算機工学」「電子通信工学」「電気電子工学」の3コースに分かれ、各コースそれぞれの比重で電気情報工学分野の論理と物理の両方を学びます。Ⅱ群から進むことが出来る学科は材料工学科、応用化学科、化学工学科、融合基礎工学科・物質材料コースです。Ⅲ群から進むことが出来る学科は融合基礎工学科・機械電気コース、機械工学科、航空宇宙工学科、量子物理工学科です。工学部の中ではⅥ群を除いて分野の多様性が特徴です。同じ融合基礎工学科でもⅢ群とは進むコースが違うことに注意が必要です。Ⅳ群から進むことが出来る学科は船舶海洋工学科、地球資源システム工学科、土木工学科です。サステナブルな地球を創造する学科です。Ⅴ群の進むことが出来る学科は建築学科です。最後にⅥ群は入学一年後に自分の進みたい学科群を選択することが出来るカテゴリーです。進路選択までに工学部全学科の分野を学べる講義を受け、研究室・研究施設を見学することができます。

(次のページへつづく)

・阪大

法は指数 106 とやや増加しています。特に C 判定値の偏差値 66 近辺の志望者が増加しています。前年度と比べ、京都大・法との併願関係が強くなっており、京都大からの志望者の流入の可能性があります。例年合格率が 60% を超えるラインが偏差値 70 以上となっています。経済も 107 とやや増加していますが、上位の志望者は減少し、偏差値 50 台後半から 60 台前半の志望者が増加しています。神戸大との併願志望者が増加しており、前年度より併願先を増やす動きが目立っています。工学部の応用理工は指数 106 とやや増加しています。一方で B 判定値 65 以上の上位の志望者が減少しており、C 判定値以下の志望者が増加しているため、難易に大きな影響は無いと予想されます。また、その他の工学部募集単位も概ね同様の傾向を今年度は示しています。外国語学部は専攻による難易が異なりますが、専攻別で比較すると欧州系言語専攻は倍率が低いですが成績レベルが高く、アジア系言語専攻は倍率が高いですが成績レベルは低い傾向にあります。昨年度も志願倍率が1倍台の学科もいくつかありましたが、阪大で外国語を学びたいと考える受験生が専攻を選ぶ時には各専攻の最低得点推移、倍率推移、募集人員に注目する必要があります。今年も難易度が上昇する可能性は低いと予想されていますが、こちらは二次試験の配点比率も77%と高く、特に英語の配点が高いことを考えると英語が得意な生徒であれば、諦めずに取り組みればチャンスは大きいと思われます。

・**神大**は人気系統の経営学部で指数 106 とやや増加していますが、C 判定値 64 以下の層で志望者が増加していてチャンスは十分あります。合格率が 60% を超えるラインは進研記述では偏差値 70 となっています。工学部の機械工は指数 114 と志願者が大幅に増加し、特に B 判定値 63 以上の上位者の志望者が増加しているため、難化の可能性があります。併願志望状況では、前年度と比べ阪大の志望者が増加しており、志望者の流入が考えられます。神戸大学の多くの学部では、共通テストの配点が高めに設定されており、共通テストの出来不出来が合否を分けることもありますので注意してください。

・**北大**の文は指数 116 と増加も B 判定値 65 未満の層での増加がメインです。現時点で総合文系との併願者が最も多いです。また大阪大、京都大との併願者数が増加しています。直近3カ年でみると、記述模試偏差値 65 以上で約 50% の合格率となっており、例年、英語での合格者・不合格者の平均偏差値差が大きいです。またここ数年、個別試験の数学の難易度変動が大きいのも特徴です。経済学部は2年連続で幅広い偏差値帯で志望者増加が見られていますが、指数は 113 と高いです。例年、英語での合格者・不合格者の平均偏差値差が大きいです。理系は現時点では、前期は全体として概ね前年並ですが、歯、獣医学部では増加しています。水産学部は指数 100 と前年並ですが、B 判定値 60 以上の層がやや増加しています。東京海洋大・海洋生物資源との併願者が最も多いです。総合理系志望者指数も 99 と前年並ですが、現時点では B 判定値 62 以上の層は過去2カ年とほぼ同じ東北大・工、理学部との併願者数が増加しています。直近3年間の記述偏差値 50 台後半の合格率は 26→27→30% と上昇傾向を示しています。総合理系各重点選抜群内での併願者が増加していますが、総合科学選抜群においては、理科で最も合格者・不合格者の平均偏差値差がついています。また、総合入試は道内志願者が3割程度と低く全国から受験生が集まっていますし、募集人員が 1000 名を超え、チャンスが拡大しています。理系における後期合格者の前期受験大学は水産学部、獣医学部以外は東大で、最近ではほぼ 50% 強の受験生が前期で東大不合格、後期北大合格となっています。

・東北大

文系は全体的に志望者が増加しています。文では宮城県・青森県・岩手県からの志望者が増加しています。共通テスト得点率 80% で、記述模試偏差値 60 台前半から合格率が上昇していますが、同じく 75% では記述模試偏差値 60 後半の記述力があることが出願の目安となります。経済学部は青森県・東京都・山形県からの志望者が増加していますが、一方で埼玉県からの志望者が減少しています。また、B 判定値 64 以上の上位者層が増加しており、厳しい入試となりそうです。共通テストでは得点率 80%、記述模

(次のページへつづく)

試偏差値 60 台後半の記述力があることが出願の目安となりそうですが、ここでは、数学・英語の出来で合否が分かれる傾向にあります。理学部は北海道、茨城県からの志望者が増加しており、B 判定値 66 以下のチャレンジ層も増えています。ここでは、毎年、数学で差がつく結果となっています。工学部は東京都からの志望者が増加。B 判定値 64 以下のチャレンジ層も増えています。共通テストで 85%以上取れば記述模試偏差値 60 台前半からでも合格率が高まることが予想されます。同じく 80%では、記述模試偏差値 60 台後半の記述力が出願の目安となりますが、数学、物理、化学で差がつく結果と例年、なっていますが、英語の対策も十分にしておく必要があります。

・一橋大

一橋大は昨年度の共通テスト得点率では 80%台半ばで合格率が 60%を超えていましたが、社会学部は 80%台前半での合格率が 50%を下回りました。記述模試では偏差値 70 台前半以上の合格者数が不合格者数を上回るラインとなっていました。25 年度入試で志願者が増えた法に関しては偏差値 74 以上がラインとなっています。経済、商は指数がそれぞれ 114、112 と増加しており、ソーシャル・データサイエンスも指数 131 と人気が高くなっています。設立 1 年目は周知が遅れていましたが、3 年目となりますますます志望者が増えています。この学科は理系からも受験可能で昨年度入試では後期の合格者のほぼ全員が理系志望者でした。国語の配点が大きい法と社会では合格者の国語の平均偏差値が 68 を超えましたが、経済、商では 66 程度が合格者平均となっています。また、同様に数学の配点の大きい経済、商では数学の平均偏差値が 70 付近となり、東大・文Ⅲの平均も上回ってきており、難化が予想されています。また、前年に続き、東大・文Ⅱ、横国・経済との併願者数が多く。私立大でも早稲田・政治経済、明治・政治経済との併願関係が強いです。

・東京科学大

理、工、物質理工、情報理工、生命理工、環境・社会理工：第一段階選抜の倍率が 25 年度 4 倍から 26 年度は 3.5 倍に変更となるので注意してください。理工学系統においては記述模試の偏差値 72 がおおむね合格率 60%以上の目安となっています。歯学部は偏差値 60 が合格率 60%以上の目安となります。理は指数 105。主な増加は C 判定以下の学力層となっています。志望者数が増加している物質理工についても、主な増加は C 判定以下の層となっていました。工全体の指数は 102。主には B 判定値以上での増加となっています。前年と比較した併願先は、慶応大・理工との併願関係が強まっています。国公立大では 23 年度から 24 年度模試でみられた他の難関国立大との併願関係の強化が今回の模試動向でも継続しています。また、女子枠に関する動向にも注目しておく必要があります。

・名大

工学部で人員変更があり、入学定員 700 名は変更ありませんが、昨年度は一般前期 626 名、推薦 74 名でしたが、今年度は一般前期 620 名、推薦 80 名と推薦の募集人員が増えています。また、物理工とマテリアル工で学校推薦女子枠が新設されました。これで工学部では環境土木・建築学科を除く学科で学校推薦女子枠が設置されたことになりました。経済では指数 109 と人気上昇。特に県外からの志望者がやや増加した上、神大・経済との併願志望者が増加しており、ここからの流入が高まれば、厳しくなることが予想され、チャレンジ層にとっては厳しい入試となりそうです。情報は指数 92、B 判定値 66 付近で志望者がやや減少しており、近年の厳しかった入試競争がやや落ち着くことが予想されますが、京大・工との併願関係がやや高まっており、流入の可能性が高いので油断はできません。工学部は全体では志望者の分布に大きな変動はなく、指数も 105 ですが、人気の高い、機械・航空宇宙では B 判定値 65 以上の層で志望者が増加。入試難易が高まる可能性があります。ここは個別試験の比率が高いが、共通テスト 85%以上で合格率が高まります。個別試験が課される数学・英語・物理・化学は記述模試偏差値 65 以上が目安となります。

以上です。不明な点は進路指導部まで問い合わせてください。年明けに今回報告できなかった医学部医学科、私立大学、地方国立大学の動向について掲載しようと思います。（文責・進路指導部・松村）